

Title	『清水物語』諸本の性格
Sub Title	
Author	柳沢, 昌紀(Yanagisawa, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1993
Jtitle	三田國文 No.18 (1993. 6) ,p.52- 64
JaLC DOI	10.14991/002.19930600-0052
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19930600-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『清水物語』諸本の性格

柳沢 昌紀

はじめに

先に私は、『清水物語』の出版をめぐる「芸文研究」六一、平4・3)において、公私の文庫、図書館に蔵されているものを中心に『清水物語』板本を四十数点とりあげ、その版種を分類整理し、各版の先後関係について考察した。すなわち、每半葉十一行で大本二巻二冊の十一行本が四版と每半葉十五行で大本挿絵入りの十五行絵入本が一版あること、十一行本四版中の一版が初版であり他の三版はいずれも初版に基づく覆刻版であること、覆刻版三版のうち二版は初版刊行後ほど経ぬ寛永年中の刊行であると推定できること、十五行絵入本は初版刊行から四十余年を経て天和二年に刊行された江戸版であることなどを報告した。

しかし、先の報告では紙数の都合で各版本の性格について詳述することができなかった。本稿では、『清水物語』の出版に関してその後明らかになった事実を報告した上で、その本文に関する問題を扱ってみたい。覆刻版本文への作者関与の有無、

数は少ないながら伝存する写本の系統、さらには江戸版仮名草子である十五行絵入本の本文の特徴などについて、検討しようと思う。

なお本論に入る前に、先の報告の内容で一つ訂正したいことがある。初版(A版)および覆刻版中の一版(B版)に見られる、板木が磨滅した丁だけの改版を通修、改版された丁を含む本を通修本としたが、これは補修(本)、修訂(本)、補訂(本)などとすべきであるとの御指摘を大沼晴暉氏より賜った。氏の御助言に感謝するとともに、通修(本)を補修(本)と訂正させていただくことにする。

一 十一行本四版について

まず、十一行本の版種について簡単に振り返っておく。十一行本は四版を数えるが、便宜的にそれらをA版、B版、C版、D版と呼び表すこととした。さらに年記、書肆名記の違いや、補修の有無により以上を細分類したのが、次に示す(表1)である。

(表1) 十一行本分類表

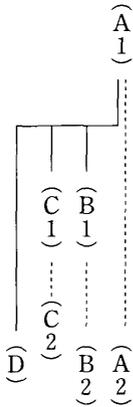
*年記と書肆名記は省略して記し、補修はその箇所(丁数)を示す。

版		分類	年記	書肆名記	補修	所在
A	B					
(A1)	(B1)	(C1)	(D)	ナシ	ナシ	慶応義塾図書館(一〇X/二三五)
寛永十五	寛永十五	寛永十五	ナシ	ナシ	ナシ	静嘉堂文庫(八四/四/一五九三三)、天理大学附属天理図書館(九一三・六一/イ一一九)ほか
ナシ	敦賀屋久兵衛	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	京都大学附属図書館谷村文庫(四一四〇/キ)、中央大学国文学研究室(九一三・五/Sa三四)ほか
(A2)	(B2)	(C2)	(D)	ナシ	ナシ	実践女子大学図書館山岸文庫、大阪府立中之島図書館(甲和/八四五)
ナシ	寛永十五	寛永十五	ナシ	ナシ	ナシ	東京大学国文学研究室(近世/三六一三/四)、大阪女子大学附属図書館(九一三・五/S)ほか
ナシ	敦賀屋久兵衛	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	東北大学附属図書館狩野文庫(狩/四/一一三九四)
(B1)	(C1)	(D)	ナシ	ナシ	ナシ	東京国立博物館(〇三〇/と九九一一)、名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫(九一三・五一/A)ほか
寛永十五	寛永十五	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	石川県立図書館李花亭文庫(八四〇/一七、取合せ)の下巻
(B2)	(C2)	(D)	ナシ	ナシ	ナシ	東京大学史料編纂所(押き/一九)
寛永十五	正保二	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	
ナシ	杉田勘兵衛	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	

とができる。

同版、もしくは補修

覆刻



四版のうち初版はA版で、B版、C版、D版はいずれもA版に基づく覆刻版である。すなわち、寛永十五年(一六三八)十月に刊行されたのはA版であった。しかしB版、C版も寛永年間もしくはそれをあまり下らない時期の刊行と推定でき、初版刊行後ほど経ずして三版が並び行われたものと思われる。また細分類の(A2)、(B2)は、それぞれ(A1)、(B1)の補修本であり、(C2)は杉田勘兵衛が(C1)を求版したものである。よって十一行本四版間の系統は、次のように図示するこ

とところで、十一行本の出版に関して、その後の調査で明らか

になったことが一つある。もう一度(表1)を御覧いただきたい。

先の報告の時点では、敦賀屋久兵衛の書肆名を記す本はA版の慶応義塾図書館蔵の一本(以下、慶大甲本と略称)を確認し得たのみであったが、その後の調査で、実はB版にも同書肆の名を記す本があることがわかった。実践女子大学図書館山岸文庫本(以下、山岸文庫本と略称)と大阪府立中之島図書館本がそれである。これは、初版であるA版と覆刻版であるB版が同一書肆で売られたという事実を示す。先の報告で述べたとおり敦賀屋の書肆名記は、本文や刊年記と墨付きが異なり別刷りであると見受けられるから、刊記ではなく敦賀屋の売り分を示すものかもしれない。しかしながら、敦賀屋がA版とB版を両方販売したという事実は動かないであろう。しかも慶大甲本の書肆名記と山岸文庫本の書肆名記は同版であり、かつその刷りの具合も似通っているから、両者はさほどの時間を隔てずして敦賀屋の店頭に並んだであろうことが想像される。

してみるとA版とB版は、B版刊行後の早い時期、同一書肆に蔵板されていたということも考えられよう。二版は、同一版元から刊行された可能性もある。

二 覆刻版本文への作者関与の有無

先に述べたとおり『清水物語』の初版はA版である。だがそのことから即(A1)本文を『清水物語』の最善本と見なし、覆刻版三版の本文を捨てて良いかという、多少の疑問が残る。そう判断する前に、覆刻版本文の成立に作者の関与がなかった

かどうかを確認しておく必要があると思われるのである。

以下、この点について検討してゆこうと思うが、その前に『清水物語』の作者は誰であるかに関する先学の所説を俯瞰しておきたい。

早く三浦周行氏は『正斎書籍考』及び『松屋筆記』に『清水物語』二冊を朝山意林庵の作とすることを報告されたが、「確據」はないと慎重な態度をとられた²⁾。その後、藤岡太郎氏が書籍目録類も意林庵作とすることに注目され、さらに頼原退蔵氏が「朝山意林庵の作たる事は諸種の傍証によつて明らかである」と断定されて、意林庵作者説がほぼ定説化したかに思われた。ところが近年、渡辺憲司氏が「朝山意林庵或いはその周辺的人物であろう」と慎重な立場を表明しておられる³⁾。なるほど意林庵作者説の根拠は『清水物語』刊行後三十五年以上を経た延宝三年(一六七五)刊の書籍目録の記載であり(寛文十年の目録にも「意林院」とはあるが⁴⁾、断定は避けたいほうが良いようにも思われる。

そこで、仮に意林庵が作者であったら、ということでは話を進めるが、意林庵は寛文四年(一六六四)九月に没したという⁵⁾。寛文四年といえはB版、C版は勿論のこと、D版も既に刊行されていたのではないか。すなわち、意林庵が作者であれば、時間的には覆刻版三版全てに関与し得た可能性があるのである。

さて、覆刻版本文への作者関与の有無を確認するために、十行本四版間の本文異同を示す。各版とも、開版後に埋木等による本文の意図的な改変が行われた様子はないので、校合にはできるだけ刷りの早いと思われる本を用いることにする。

(表2) 十一行本四版対校表

* (A1) と (B1)、(C1)、(D) との異同を記す。よって空欄はその箇所が (A1) に同じであることを示す。
* 清濁の差、句読点の有無等は、本文解釈上問題となりそうな場合のみ記し、それ以外は省略した。

上 四表 7

(A1) 慶大甲本
学文

(B1) 東大国文本
学文

(C1) 名大神宮皇学館本

(D) 東大史料編纂所本

五裏 9 行ひよく

七表 11 先たねをうへて

七裏 1 年を経て

一二表 2 身のためを

6 位相応

一三裏 10 鍬石

一六表 2 我物にして

一六裏 5 食物

一八表 1 用る人も

一九裏 7 おとしめられ

9 傳説

一二裏 1 侍

二三表 8 いやしく成たるは

二三裏 10 友だち

二四裏 6 聖人

11 ゑたることゝ。

二七表 4 たし。なみまめやか

二七裏 10 したかへといふ事

二九表 3 運命

二九裏 1 太公望

身のためを

鍬石

我物にして

食物

用る人も

おとしめられ

傳説

侍

いやしく成たるは

友だち

聖人

ゑたることゝ。

たしなみまめやか

したかへしいふ事

運命

太公望

三〇表 2 大勇
 三〇裏 4 すべて事は
 下 一表 4 外典
 9 世の中
 一裏 6 詩をつくり
 二表 5 主もあれ
 五裏 4 来世
 七裏 10 罪つくりたる人
 一〇裏 4 答曰
 11 物をいひ
 一二裏 7 四百余州
 一三裏 9 天下知君たち
 11 一念の違たる
 一四表 2 我より下なる
 6 くらます所
 10 日本
 一五裏 4 千里の馬なれば
 一七表 2 物ことに
 3 深山桜
 4 蔵
 5 武勇
 一七裏 8 ぐちなる者
 10 分別
 一九表 8 世間
 八 孔子

世間

蔵

罪つくりたる人

世の中
詩をつくり

大勇
すべき事は

来世

四百余州

我より下なる
くらます所

深山桜

ぐちなる者
分別

外典

主もあれ

答曰
物をいひ

天下知君たち
一念の違たる

日本
千里の馬なれば
物とに

武勇

分別

孔子

二二表 5	運命 <small>うんめい</small>	
二二裏 1	平助が。本能寺にて腹 <small>はら</small>	
二三裏 5	返答 <small>へんたう</small> きりし	
10	いかゝととふ	いゝととふ
二六裏 7	目をみせ	
二七表 2	人く達	
5	宗廟の臣	
7	普代衆 <small>ふだいしゆ</small>	
二七裏 9	宗廟の臣	
二八裏 9	悪王 <small>あくわう</small>	
二九表 1	何程よき主君 <small>なにほどよきしゅくん</small>	
4	箕子 <small>きし</small>	
二九裏 3	つかへ給へり	
9	諸朝 <small>しよてう</small>	
三二裏 9	天下國家の君 <small>てんかこくかのきみ</small>	
三三表 3	元龍の悔 <small>げんりやうのくゐ</small>	

運命うんめい

平助が。本能寺にて腹

返答へんたう きりし

目をみせ

人く達

宗廟の臣

普代衆ふだいしゆ

宗廟の臣

悪王あくわう

何程よき主君なにほどよきしゅくん

箕子きし

つかへ給へり

諸朝しよてう

天下國家の君てんかこくかのきみ

元龍の悔げんりやうのくゐ

御覽の通り、A―B間の異同とA―C間の異同とA―D間の異同はほとんど重ならない。A―C間の異同とA―D間の異同がわずかに二箇所(下一七裏10、同二九表4)一致しているが、これは版面を見ると、偶然の一致であることがわかるのであつた。よつて先に述べたごとく、B版、C版、D版はそれぞれA版に基づく覆刻版と解せるのである。

さてB版はA版との異同が九例と少なく、逆にD版はA版と

の異同が三三例と多い。しかし二版とも、異同は振仮名の脱落や単純な彫り誤りがほとんどで、B版はA版の本文に比較的忠実な覆刻版、D版は雑な覆刻版と言える。つまり、いずれもその異同には、作者の関与の形跡が認められないのである。

一方C版の本文には、A版の誤りを訂正している箇所がある。A―C間の異同は二二例であるが、そのうち振仮名の有無以外の異同は次の一一例である(上が(A1)、下が(C1))。

①食物―食物(上一六裏5)

②分別―分別(下一七裏10)

③つたへ給へり―つかへ給へり(下二九裏3)

④元龍の悔―元龍の悔(下三三表3)

⑤傳説―傳説(上一九裏9)

⑥たし。なみまめやか―たしなみまめやか(上一二七表4)

⑦すべて事は―すべき事は(上一〇裏4)

⑧くぢなる者―ぐぢなる者(下一七裏8)

⑨鑛石―鑛石(上一三裏10)

⑩おどしめられ―おとしめられ(上一九裏7)

以上を本文上の正誤という観点から見ると、A版の方が正しい例が①から④の四例、C版の方が正しい例が⑤から⑧の四例、どちらの本文も可能な例が⑨から⑪の三例ということになる。このうちC版の方が正しい⑤から⑧の四例の異同は、明らかに改変者の訂正意識に出るものと言えよう。また、どちらの本文も可能な⑨から⑪の三例の異同のうち、⑩は濁点の単純な脱落かもしれないが、残り二例は訂正意識にかかるものと考えられるのではなからうか。

そうすると、その訂正意識が作者のものであるか、それとも本屋、筆工など作者以外の人物のものであるかということを考えてみる必要がある。異同の内容をさらに分析してみると、C版の方が正しい四例の異同のうち⑥、⑦、⑧の三例は、本文を読めば誰にでもすぐ気がつく誤りの訂正である。また⑤の「傳説」から「傳説」への訂正であるが、「傳」と「傳」

はくずすとほぼ同形になるのであり、実は表記の上では振仮名が変わっただけなのである。傳説は『史記』般本紀、『尚書』説命、『孟子』告子下などに見える人物だが、本文中に「ついちつく。日用の中よりえらひいたされて。天下をたすくる大臣となれり」と説明され、韓信とともにとりあげられていることから、A版の振仮名の誤りは作者以外の人物にも気づかれ易かったのではないかと思われる。

一方また、C版では①から④の四例の誤りが生み出されている。殊に④は、『周易』繫辭上伝に見える元龍の悔という有名な言葉に、おかしな振仮名を付している。「兀」と「元」とはこれもなくずすとほぼ同形になるのではあるが、改変者の本文理解の浅さを感じないわけにはいかない。したがって改変者は作者以外の人物であったと思われる。C版本文の成立にも作者の関わりはなかつたと判断して良からう。

三 写本と十一行本

ところで、『清水物語』伝本中には数本の写本が含まれている。ここでそれらの位置づけを行っておきたい。まず、管見に入った学習院大学図書館本および刈谷市中央図書館村上文庫本の略解題を記す。

(写一) 学習院本(学習院大学図書館 三一三/五四)

大本袋綴一冊。(江戸後期)写。

表紙 本文共紙表紙。二六・八×二一・二釐。なお、その外側

には学習院の所蔵となつてから付されたと思われる保護

表紙あり。

外題 本文共紙表紙左肩に打付書で「清水物語」(本文と別筆か)。

料紙 楮紙。

紙高 二六・九糎。

序 一丁表。

内題 「清水物語 上」(二丁表)、「清水物語下向」(三二丁表)。

匡郭・界線・版心題・丁付 なし。

字高 二一・六五糎(二丁表本文初行)。

本文 每半葉一一行、行二二字内外、句読点なし、振仮名少々あり。

丁数 墨付六一丁(序一丁、上卷二九丁、下卷三一丁)。

印記 「学習／院図／書記」、「立花種忠(以上墨書)寄贈」、および明治三八年六月二日に学習院の所蔵に帰した旨記す

楕円印。

備考

「寛永拾五^{戊寅}十月吉旦開之」という(A1)、(B1)、(B2)、(C1)に見られる刊年記が、本文の後に筆写されている(六一丁裏)。

錯簡があり、一〜一三丁、三八〜五八丁、一四〜三七丁、五九〜六一丁の順に綴じられている。

(写2) 刈谷村上文庫本(刈谷市中央図書館村上文庫 一八〇)

大本袋綴一冊。享保十二年写(板本敷写し)。

表紙 茶色無地紙。二七・二×一九・二糎。

題簽 表紙左肩に双辺刷枠題簽「清水物語 全」(墨書)。

料紙 楮紙。

紙高 二七・〇糎

序 一丁表。

内題 「清水物語上」(二丁表)、「清水物語下向」(三五丁表)。

匡郭・界線・版心題・丁付 なし。

字高 上卷二一・四五糎(二丁表本文初行)、下卷二一・四糎(三五丁表本文初行)。

本文 每半葉一一行、行一九字内外、句読点と振仮名は十一行本よりやや少ない。

丁数 墨付六八丁(序一丁、上卷三三丁、下卷三四丁)、その後に遊紙一丁。

印記 「刈谷／図書／館蔵」。

備考 十一行本板本の敷写し。学習院本と同様、「寛永拾五^{戊寅}十月吉旦開之」という刊年記も筆写されている。

後表紙見返し右側に「享保拾式^未 六月 重吉書也」(本文と同筆)とある。

一丁表右上の余白に、本文とは別筆の「清水物語^{意林菴著}／續清水物語^{同著}／祇園物語^{清水修行著}／(低一格)清水物語ノ答ナリ」という識語あり。

学習院本、刈谷村上文庫本とも、備考に記したとおり寛永十五年の刊記が筆写されており、板本、それも十一行本の写しであることが明らかである。二本の本文と十一行本各版の本文とを照らし合わせてみたところ、学習院本はA版かB版の写し、刈谷村上文庫本はA版の敷写しであることがわかった。

さて、これまで見てきた諸本の中から「清水物語」の最善本

を選ぶとすれば、それは一応初版の（A1）本文ということになりそうである。しかしながら、C本文と比較した際述べたとおり、A本文にもまた筆工など作者以外の人物の裁量下に生じたと思われるいくつかの誤りが見られる。A本文がC版やB版の本文より作者の意向に近いとしても、その差はほんのわずかであると言えよう。

四 十五行絵入本の特徴

次に、十五行絵入本の本文について検討してみたい。十五行絵入本は、天和二年（一六八二）正月、江戸鱗形屋三左衛門の刊行である。鱗形屋は、上方で実績を上げた仮名草子を絵入本に仕立て直して出すことを繰り返した。この時期は、鱗形屋のほか松会などが、一丁あたりの行数と行字数の多い、上方版とは一風変わった挿絵の入った江戸版仮名草子を続々と刊行していた。十五行絵入本は、少なくとも版面の上からは典型的な江戸版仮名草子と言えそうである。所在を確認し得た唯一の伝本である日本大学総合図書館本は、下巻のみの端本であるが、十一行本では三十三丁と二行であった下巻本文丁数が、半葉を用いた師宣風の挿絵三面を含めて十六丁弱に減っている。

十一行本と十五行絵入本との異同は、細かい表記の差まで数えるとかかなりの数になる。そこで全ての異同を記す煩は避け、早速十五行絵入本本文の特徴をまとめて次に示し、その各々について具体例を挙げて検証したい。

(1) 清濁の差、振仮名の有無、漢字と仮名の使い分けは勿論、漢字の用字、仮名遣いに至るまで、十一行本の表記をそのま

まとうとしない。

(2) 本文の不用意な脱落や重複が多い。

(3) 文意をよく理解しないが故の誤りがある。

まず(1)は表記面の特徴であるが、ことに特異なのは漢字の用字と仮名遣いである。漢字の用字は、「川」（十一行本下三表1、以下十一行本の表記にのみその箇所を付記）が「河」になつてゐるほか、「舟」（下三表1等）、「一人」（下一八表6等）、「二人」（下一八表8等）といった頻出語がほとんど「船」、「一人」、「二人」と改変されている。仮名遣いは、「よわひ」（下一裏2）が「よはひ」となる例、「えきなし」（下二表10）が「ゑきなし」となる例、「おや」（下二表11）が「親」となる例など、「わ」と「は」、「え」と「ゑ」、「お」と「を」を交換する例が目立つ。便宜的に歴史的仮名遣いを規準にすると、「よわひ」↓「よはひ」のような改正例もあるが、むしろ改悪例の方が多い。漢字、仮名のこの種の改変が多いのは、筆工が、十一行本の表記よりも自らの用字法を優先させた結果なのであろうか。それとも、ほかに何か理由があつたのであろうか。

次に(2)であるが、脱落には「…違たる所あるにや。ひさしくおさまりたるはまれなり」（下二三裏11）が「…ちかひたるはまれなり」となる例、重複には「…ならば。ちきやうとるものともはやくにたゝぬものならん」（下一八裏4）が「…ならばちきやうとるものともはやくにたゝぬものならんもしまたいつれも用にたつものならはちきやうとるものともはやくにたゝぬものならん」となる例がある。前者は「違たる」から「おさまりたる」に目移りしたため、後者は「やくにたゝぬものなら」まで

来て二行前の「ならは」に目移りしたため生じた誤りと考えられよう(傍点筆者)。このほかにも助詞や漢字などの脱落や重複が、随所に見られる。『清水物語』は論理性を旨とする作品であるから、これらの誤りは致命的な誤りと見える。

(3)は例えば、「茶屋のあるし」(下一六裏10)が「茶屋のあるへし」になる例、「この手がしは」(下二六表3)が「このてからは」になる例、「元龍の悔」(下三三表3)が「元龍の悔」となる例などを挙げる事ができる。最後の例は、前述のごとく十一行本四版中のC版が「元龍の悔」という本文を持つから、C版に依拠して引き継いだ誤りかとも思われたが、C版が「つかへ給へり」(下二九裏3)、「諸越」(下二九裏9)とする二箇所は、それぞれ「つたへ給へり」、「諸朝」で、A版と一致している。「元龍の悔」↓「元龍の悔」という誤りは、比較的生じ易いのではないかと思われるから、たまたま同様に誤ったと考えて良いのではなからうか。因みに十五行絵入本の本文は、恐らくA版かB版に拠ったものである。

以上述べてきたごとく、十五行絵入本の本文はかなり杜撰なものであった。読んでも意味の通らない箇所が随分ある。他の鱗形屋版仮名草子では『薄雪物語』(刊年不明)について、言葉の省略や言い換え、語順の変更が見られ、文意の通じない箇所のあることが報告されている。これは、『清水物語』とよく似た改変態度であるといえよう。一方、『ひそめ草』の改題本『鸚鵡新徒然草』(刊年不明)は、字句が補われたり言い換えられたりして、意味等が通りやすくなっている箇所もあるという。

『清水物語』十五行絵入本には、そういった箇所は見受けられ

ない。

おわりに

『清水物語』の出版について、敦賀屋久兵衛は初版のA版と覆刻版のB版を両方扱ったことを報告し、また本文について、十一行本中覆刻版三版の本文成立に作者の関わりはなかったこと、寓目し得た写本の本文は十一行本の写しであること、十五行絵入本の本文はかなり杜撰なものであることなどを述べた。最後に、本稿では明らかでなかった二つの問題について、いささか私見を述べておきたい。

まず第一は、十一行本中A版の一本およびB版の二本に刷られている敦賀屋久兵衛の書肆名記の問題である。これが刊記なのか、敦賀屋の売り分を示すものなのか、あるいはそれ以外の意味を有するものなのか、ということとは、『清水物語』についてのみ云々していても仕方がない。複数の作品にまたがって摺刷された敦賀屋の書肆名記は、寛永期を中心に少なくとも五種存するようである。そのうち二種が『清水物語』に使われていたわけだが、敦賀屋の名が記されている本の網羅的な調査を行い、その意味するところを確定する必要がある。

第二に、鱗形屋版仮名草子の本文に、共通する特徴を認めることができるかどうか、という問題がある。これは、仮名草子の上方版と江戸版の関係を説明する上で、重要な問題であるといえよう。本稿では、『清水物語』十五行絵入本の本文改変態度が『薄雪物語』とは似ているが、『鸚鵡新徒然草』とはやや異なることを報告し得たに過ぎない。今後、対象を他の作品に広げ

て調べてゆく必要がある。同時に、挿絵の技術が洗練されてゆく一方で本文の正確さは必要とされなかつたのか、刊行年代や刊行場所の差がそれによって反映しているのか、といったことも考えてみるべきであろう。

注

- (1) 山岸文庫本、中之島図書館本とも、版種は(B1)で、下巻三四丁(最終丁)表に「寛永拾五^五或十月吉旦開之」という年記がある。同後表紙見返しに、山岸文庫本は「洛陽四條坊門／敦賀屋久兵衛」(A1)の慶大甲本に刷られているものと同版、中之島図書館本は「京四條坊門通／敦賀屋久兵衛」(方形の双辺枠あり)と書肆名が刷られている。すなわち、別版である慶大甲本と山岸文庫本と同じ書肆名記が、同版である山岸文庫本と中之島図書館本に別の書肆名記が使われている。
- (2) 三浦周行氏「後光明天皇の御好學と朝山意林庵」(『史学雑誌』二三四、明45・4)
- (3) 藤岡作太郎氏「近代小説史」(大6 大倉書店、のち岩波書店刊)藤岡作太郎著作集「四に収録」の第二章「儒仏の勢力と教訓的著作」。
- (4) 頼原退蔵氏「仮名草子の三教一致的思想について」(『国語国文』二一一、昭7・12、のち三省堂刊)「江戸文芸論考」、中央公論社刊『頼原退蔵著作集』一七に収録)
- (5) 新日本古典文学大系「仮名草子集」(平3 岩波書店の一四〇頁、注(2)に同。
- (6) 注(2)に同。
- (7) A版とB版には、それぞれ補修本(A2)、(B2)があるが、いずれも板木が磨滅した丁だけ彫り直したものである。なお、(A1)と(A2)の異同は後掲(付表1)、(B1)と(B2)の異同は同(付表2)参照。
- (8) 前述拙稿の「二 初版はどの版であるか」参照。
- (9) まずD版は寛永十五年の年記を持たないから、学習院本、刈谷村

上文庫本ともD版の写しではない。以下、両本を別々に見てゆく。学習院本は、C版特有の「傳説」(上二九裏9)、「諸越」(下二九裏9)を引き継がず、それぞれ「傳説」、「諸朝」とするので、C版の写しではない。B版とは「友だち」(上三三裏10)が一致するが、「いととふ」(下二三裏10)は「いか」ととふ^とであり一致しない。学習院本は、例えば「紅葉」(上二表6)を「赤葉」、「ついるつくはかりなる」(上二表11)を「つへつくはかりの」とするなど書写態度が比較的自由であることから、A版、B版のいずれの写しであるかは決り難い。また刈谷村上文庫本は、B版特有の「友だち」等、C版特有の「諸越」等を引き継がず、それらの箇所がみなA版と一致しているのので、A版の写しである。

(10) 清濁の差、句読点の有無、漢字と仮名の使い分けは本文解釈上問題になりそうなものを以外省略しても、異同は下巻だけで一四〇数例にのぼる。

(11) 主な異同は後掲(付表3)参照。

(12) C版に依拠したのではないと判断する理由は既に述べたが、D版に依拠したということも考えにくい。D版特有の「千里の馬たれは」(下一五裏4)、「物」とに「と」とするからである。しかし、A版「千里の馬なれば」、「物こと」ととするからである。しかし、A版B版のどちらに拠つたものであるかは決め難い。B版に特有の「いととふ」(下三三裏10)を引き継がず、「いか」ととふ」とすることから、A版に依拠したものと決したいところだが、この一例だけで断定するのはためらわれる。A版、B版のいずれかに拠つたとするのが、妥当なところであろう。

(13) 松原秀江氏「薄雪物語板本考」(『近世文芸』二七・二八合併号、昭52・5)

(14) 近世文学書誌研究会編「近世文学資料類従・仮名草子編29」(昭52 勉誠社)の関場武氏による解題。

(15) 渡辺守邦氏の御教示による。

(16) 注(1)参照。

〈付表1〉(A1) — (A2) 対校表

(A1) 慶大甲本 (A2) 京大谷村本

下二三裏9 天下知君たち 一念の違。たる

11 一念の違。たる

〈付表2〉(B1) — (B2) 対校表

*清濁の差、句読点の有無等は省略した。

(B1) 東大国文本 (B2) 東北大狩野本

上二三表1 欲 道理想物 食物 心みに

一四表6 道理想物 食物 心みに

一六裏5 食物 心みに

二〇表9 心みに

〈付表3〉十一行本—十五行絵入本対校表

*十一行本(A1)と十五行絵入本の異同のうち、本文解釈上問題となりそうなもののみ任意に選んで次に示す(振仮名の明らかな誤刻等は省略した)。なお、異同箇所の丁数とその表裏、行数は、(A1)についてのみに記すことにする。

(A1) 慶大甲本 (十五行絵入本) 日大本

下 一表3 のへられけるは おほくは候へとも

4 おほくは候へとも

五表3 此せかいにありて 此せかいにありても

六表2 おどしたる をとしたる

七裏3 ぜんたいのになん ぜんたいの人

一〇表10 やふらぬ

一〇裏2 さたせられ候

5 二人くらへて

二二裏5 つのりて

一三表11 大けん人

一三裏11 違たる所あるにや。ひ

さしくおさまりたるは

まれなり。

一四裏6 物よみのいふ事は

ものよみなとといふ事は

一六裏10 茶屋のあるし

一七裏11 しりたるを

一八裏2 国中人く

4 ならば。ちきやうとるものともはやくにたゝぬものならん

ぬものならん

ものともはやくにたゝぬものならんもしまたい

つれも用にたつものならはちきやうとるもの

ともはやくにたゝぬものならん

よくしる人

11 よく知。人

一九表6 千万人一日

一九裏6 しるへし

二〇表9 もうしといふ本

二二表5 腹切て

腹切て

腹切て

- | | | |
|-------|----------------------------|----------------------------|
| 二三裏 3 | 食物 <small>くわもつ</small> えらひ | 食物 <small>くわもつ</small> えらひ |
| 二五表 7 | 何事 <small>なにごと</small> も | 何事 <small>なにごと</small> もく |
| 11 | ひはんしけるは | ひはんしるは |
| 二五裏 2 | おろそかなれは | おろかなれは |
| 9 | 花のごとく | 花ごとく |
| 二六表 3 | この手がしは | このてからは |
| 二七表 5 | 客 <small>きやくじん</small> 臣 | 客 <small>きやくじん</small> 仁 |
| 二八裏 6 | ゆめく | ゆめ |
| 三三表 3 | 亢龍 <small>けんりゆう</small> の悔 | 元龍 <small>げんりゆう</small> の悔 |
| 6 | くやみある | 悔 <small>くわい</small> ある |
| 三三裏 5 | まことは | まことに |

付記

本稿を成すにあたり、大阪府立中之島図書館本の存在を御教示賜った岡雅彦先生、並びに貴重な御意見を賜った関場武先生に、厚く御礼申し上げます。また、御所蔵本を快く閲覧に供して下さった公私の文庫、図書館の方々に、深甚の謝意を捧げる次第である。

(やなぎさわ まさき)